

柏崎刈羽原子力発電所第7号機 工事計画審査資料	
資料番号	KK7 添-2-044-3 改1
提出年月日	2020年5月14日

V-2-10-4-2-1 5号機原子炉建屋内緊急時対策所（対策本部）

二酸化炭素吸収装置の耐震性についての計算書

K7 ① V-2-10-4-2-1 R0

2020年5月

東京電力ホールディングス株式会社

V-2-10-4-2-1 5号機原子炉建屋内緊急時対策所（対策本部）

二酸化炭素吸収装置の耐震性についての計算書

## 目 次

1. 概要	1
2. 一般事項	1
2.1 構造計画	1
3. 固有周期	3
3.1 固有周期の算出	3
4. 構造強度評価	4
4.1 構造強度評価方法	4
4.2 荷重の組合せ及び許容応力	4
4.2.1 荷重の組合せ及び許容応力状態	4
4.2.2 許容応力	4
4.2.3 使用材料の許容応力評価条件	4
4.3 計算条件	4
5. 機能維持評価	8
5.1 電氣的機能維持評価方法	8
6. 評価結果	9
6.1 重大事故等対処設備としての評価結果	9

## 1. 概要

本計算書は、V-2-1-9「機能維持の基本方針」にて設定している構造強度及び機能維持の設計方針に基づき、5号機原子炉建屋内緊急時対策所（対策本部）二酸化炭素吸収装置（以下「二酸化炭素吸収装置」という。）が設計用地震力に対して十分な構造強度及び電氣的機能を有していることを説明するものである。

二酸化炭素吸収装置は、重大事故等対処設備においては常設耐震重要重大事故防止設備及び常設重大事故緩和設備に分類される。以下、重大事故等対処設備としての構造強度評価及び電氣的機能維持評価を示す。

なお、二酸化炭素吸収装置は、V-2-1-14「計算書作成の方法」に記載の直立形盤であるため、V-2-1-14「計算書作成の方法 添付資料-9 盤の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づき評価を実施する。

## 2. 一般事項

### 2.1 構造計画

二酸化炭素吸収装置の構造計画を表2-1に示す。

表 2-1 構造計画

計画の概要		概略構造図
基礎・支持構造	主体構造	
<p>二酸化炭素吸収装置は、基礎に固定されたチャンネルベースに取付ボルトで設置する。</p>	<p>直立形 (鋼材及び鋼板を組み合わせた自立閉鎖形の盤)</p>	<p>【二酸化炭素吸収装置】</p> <p>正面 1500</p> <p>側面 1500</p> <p>2600</p> <p>盤</p> <p>取付ボルト</p> <p>基礎</p> <p>チャンネルベース</p> <p>(長辺方向)</p> <p>(短辺方向)</p>

(単位：mm)

### 3. 固有周期

#### 3.1 固有周期の算出

振動試験装置により固有振動数を測定する。測定の結果、固有周期は0.05秒以下であり、剛であることを確認した。固有周期の算出結果を表3-1に示す。

表3-1 固有周期 (単位：s)

水平	0.040
鉛直	0.039

#### 4. 構造強度評価

##### 4.1 構造強度評価方法

二酸化炭素吸収装置の構造強度評価は、V-2-1-14「計算書作成の方法 添付資料-9 盤の耐震性についての計算書作成の基本方針」に記載の耐震計算方法に基づき行う。

##### 4.2 荷重の組合せ及び許容応力

###### 4.2.1 荷重の組合せ及び許容応力状態

二酸化炭素吸収装置の荷重の組合せ及び許容応力状態のうち重大事故等対処設備の評価に用いるものを表 4-1 に示す。

###### 4.2.2 許容応力

二酸化炭素吸収装置の許容応力は、V-2-1-9「機能維持の基本方針」に基づき表 4-2 のとおりとする。

###### 4.2.3 使用材料の許容応力評価条件

二酸化炭素吸収装置の使用材料の許容応力評価条件のうち重大事故等対処設備の評価に用いるものを表 4-3 に示す。

##### 4.3 計算条件

応力計算に用いる計算条件は、本計算書の【二酸化炭素吸収装置の耐震性についての計算結果】の設計条件及び機器要目に示す。

表 4-1 荷重の組合せ及び許容応力状態（重大事故等対処設備）

施設区分		機器名称	設備分類* <sup>1</sup>	機器等の区分	荷重の組合せ	許容応力状態
その他発電用 原子炉の附属 施設	緊急時対策所	5号機原子炉建屋内緊急時対策所 (対策本部) 二酸化炭素吸収装置	常設耐震／防止 常設／緩和	—* <sup>2</sup>	$D + P_D + M_D + S_s$ * <sup>3</sup>	IVAS
					$D + P_{SAD} + M_{SAD} + S_s$	VAS (VASとして IVASの許容限界 を用いる。)

注記\*1：「常設耐震／防止」は常設耐震重要重大事故防止設備，「常設／緩和」は常設重大事故緩和設備を示す。

\*2：その他の支持構造物の荷重の組合せ及び許容応力を適用する。

\*3：「 $D + P_{SAD} + M_{SAD} + S_s$ 」の評価に包絡されるため，評価結果の記載を省略する。



表 4-2 許容応力（重大事故等その他の支持構造物）

許容応力状態	許容限界*1, *2 (ボルト等)	
	一次応力	
	引張り	せん断
IVAS	1.5・f <sub>t</sub> *	1.5・f <sub>s</sub> *
VAS (VASとしてIVASの許容限界を用いる。)		

注記\*1：応力の組合せが考えられる場合には，組合せ応力に対しても評価を行う。

\*2：当該の応力が生じない場合，規格基準で省略可能とされている場合及び他の応力で代表可能である場合は評価を省略する。

表 4-3 使用材料の許容応力評価条件（重大事故等対処設備）

評価部材	材料	温度条件 (°C)		S <sub>y</sub> (MPa)	S <sub>u</sub> (MPa)	S <sub>y</sub> (R T) (MPa)
		周囲環境温度	40			
取付ボルト	SS400 (40mm<径)	周囲環境温度	40	215	400	—

## 5. 機能維持評価

### 5.1 電氣的機能維持評価方法

二酸化炭素吸収装置の電氣的機能維持評価は、V-2-1-14「計算書作成の方法 添付資料-9 盤の耐震性についての計算書作成の基本方針」に記載の評価方法に基づき行う。

二酸化炭素吸収装置に設置される器具の機能確認済加速度は、V-2-1-9「機能維持の基本方針」に基づき、二酸化炭素吸収装置の確認は、加振試験で得られた機能確認済加速度と評価用加速度である設置場所の最大床応答加速度を比較することで実施する。

機能確認済加速度を表 5-1 に示す。

表 5-1 機能確認済加速度 (×9.8m/s<sup>2</sup>)

評価部位	方向	機能確認済加速度
二酸化炭素吸収装置	水平	2.01
	鉛直	1.77

## 6. 評価結果

### 6.1 重大事故等対処設備としての評価結果

二酸化炭素吸収装置の重大事故等時の状態を考慮した場合の耐震評価結果を以下に示す。発生値は許容限界を満足しており，設計用地震力に対して十分な構造強度及び電氣的機能を有していることを確認した。

#### (1) 構造強度評価結果

構造強度評価の結果を次頁以降の表に示す。

#### (2) 機能維持評価結果

電氣的機能維持評価の結果を次頁以降の表に示す。

【二酸化炭素吸収装置の耐震性についての計算結果】

1. 重大事故等対処設備

1.1 設計条件

機器名称	設備分類	据付場所及び床面高さ (m)	固有周期(s)		弾性設計用地震動 S <sub>d</sub> 又は静的震度		基準地震動 S <sub>s</sub>		周囲環境温度 (°C)
			水平方向	鉛直方向	水平方向 設計震度	鉛直方向 設計震度	水平方向 設計震度	鉛直方向 設計震度	
二酸化炭素吸収装置	常設耐震/防止 常設/緩和	緊急時対策所 T. M. S. L. 28. 450 (T. M. S. L. 27. 800*)	0. 040	0. 039	—	—	C <sub>H</sub> =1. 67	C <sub>V</sub> =1. 45	40

注記\* : 基準床レベルを示す。

1.2 機器要目

部材	m <sub>i</sub> (kg)	h <sub>i</sub> (mm)	d <sub>i</sub> (mm)	A <sub>b i</sub> (mm <sup>2</sup> )	n <sub>i</sub>	S <sub>y i</sub> (MPa)	S <sub>u i</sub> (MPa)
取付ボルト (i = 2)	1660	956	16 (M16)	201. 1	12	215 (40mm<径)	400 (40mm<径)

部材	ℓ <sub>1 i</sub> * (mm)	ℓ <sub>2 i</sub> * (mm)	n <sub>f i</sub> * (mm)	F <sub>i</sub> (MPa)	F <sub>i</sub> * (MPa)	転倒方向	
						弾性設計用地震動 S <sub>d</sub> 又は静的震度	基準地震動 S <sub>s</sub>
取付ボルト (i = 2)	697	703	4	—	258	—	長辺方向
	678	722	4				

注記\* : 各ボルトの機器要目における上段は短辺方向転倒に対する評価時の要目を示し、  
下段は長辺方向転倒に対する評価時の要目を示す。

1.3 計算数値

1.3.1 ボルトに作用する力

(単位：N)

部材	F <sub>bi</sub>		Q <sub>bi</sub>	
	弾性設計用地震動 S <sub>d</sub> 又は静的震度	基準地震動 S <sub>s</sub>	弾性設計用地震動 S <sub>d</sub> 又は静的震度	基準地震動 S <sub>s</sub>
取付ボルト (i=2)	—	5.586×10 <sup>3</sup>	—	2.719×10 <sup>4</sup>

1.4 結論

1.4.1 ボルトの応力

(単位：MPa)

部材	材料	応力	弾性設計用地震動 S <sub>d</sub> 又は静的震度		基準地震動 S <sub>s</sub>	
			算出応力	許容応力	算出応力	許容応力
取付ボルト (i=2)	SS400	引張り	—	—	σ <sub>b1</sub> =28	f <sub>ts1</sub> =193*
		せん断	—	—	τ <sub>b1</sub> =12	f <sub>sb1</sub> =148

すべて許容応力以下である。

注記\* :  $f_{tsi} = \text{Min}[1.4 \cdot f_{toi} - 1.6 \cdot \tau_{bi}, f_{toi}]$

1.4.2 電氣的機能の評価結果

(×9.8m/s<sup>2</sup>)

		評価用加速度	機能確認済加速度
二酸化炭素吸収装置	水平方向	1.39	2.01
	鉛直方向	1.21	1.77

評価用加速度 (1.0・ZPA) はすべて機能確認済加速度以下である。

